障害者教育・福祉学研究
第 14 巻，pp.　59～65（3，2018）

ソーシャルワーク・アセスメントに関する研究の動向からみたソーシャルワーク・アセスメントの意義・課題

中根　悠（愛知教育大学教育学研究科修士課程）
佐野　真紀（愛知教育大学福祉講座）

要約　本研究は，ソーシャルワーク・アセスメントを実践するうえで核となる概念や方法が確立されていないまま，実践方法が展開されているという指摘に基づいて，先行研究の分析を通して現状におけるソーシャルワーク・アセスメントの意義と課題を考察することを目的とした。その結果，ソーシャルワーク・アセスメントの実施者はクライエントの主観的情報を含むあらゆる情報を収集・分析しているが，ケアマネジメントにならって使用されるようになったアセスメントツールでは，主観的な情報を書き起こすことができない，アセスメントを実施する際の援助者の主観をアセスメントツールでは考慮することができないという課題が明らかになった。そのため今後の研究では，アセスメント実施者の「技」の分析が必要になるということが示唆された。
キーワード：アセスメント，ソーシャルワーク，アセスメントツール

Ⅰ．はじめに

ソーシャルワークの展開過程におけるアセスメント（以下，「ソーシャルワーク・アセスメント」）が，「援助の基本プロセス」であることは多くの先行研究から明らかになっている（玉木 2015 など）。大谷（2013）によると，1980 年代にはすでにアセスメントはソーシャルワークの本質と認識されるようになっている（大谷 2013:3）。

しかしソーシャルワーク・アセスメントは，「未だ用語の解釈も共有されておらず，具体的内容や作業方法 については混乱が残る」（大谷 2013:2）と指摘されているように，その内容は統一されているとはいえない。

またソーシャルワーク・アセスメントに関する研究を概観すると，核となるソーシャルワーク・アセスメントの概念や全体のアセスメントの方法が確立されていないまま，各現場での実践方法の展開が進んでいる印象をうける。

そこで本研究の目的を，先行研究を分析することにより，現状におけるソーシャルワーク・アセスメントの意義と課題を考察することとする。

Ⅱ．ソーシャルワーク・アセスメントの性質

1. プロセスからみたソーシャルワーク・アセスメント

ソーシャルワークの展開過程は，「①インテーク，②アセスメント，③援助目標の設定，④援助計画，⑤援助活動，⑥事後評価」に分けることができる（岡本 2007:672）。文献によってその過程の名称は異なるが，その区分はおおむね一致している。

その中のアセスメントの局面では，利用者にとって必要な情報を収集し，それらの情報はどのような意味があるかを，これまで培ってきた知識，技術を総合的経験と統合し，「現在の状態はこうであるが，将来はこうなる可能性がある」と予測・判断できるようにする必要がある。そのため，アセスメントは「情報収集」と「情報分析」に分かれている（柴田 2007:726）。

以上のことから，本研究での「ソーシャルワーク・アセスメント」の作業定義を中村優一・一番ヶ瀬康子他監修『エンサイクロペディア社会福祉学』中央法規より，「『情報収集』と『情報分析』（柴田 2007:726）を実施するソーシャルワーク過程の一局面（岡本 2007:672）」とする。

また，ソーシャルワーク過程は相互に作用しあっているため，過程からアセスメントのみを取り出してその役割を考察することはあまり効果的ではない。中村（1998）は，アセスメントと関係する他局面（インテーク，プランニング，インターベンション，モニタリング，フィードバック）とのかかわりをとおしてアセスメントのもつ機能を整理する（中村 1998:156-159）ことで，アセスメントはソーシャルワーク過程における一局面でありながら，他局面でもその機能を有するであるため，ソーシャルワーク全過程に影響を与えることを明らかにした。

また中村（1998）は，インテークとアセスメントの関連については，「インテークが目的を達成するために広く具体的な情報収集と認識を行う機能を果たしている」ため，単純に線引きすることができない（中村 1998:157）と過程局面の曖昧さを指摘している。

太田（1995）によると，プランニングやインターベンションまでの過程を包摂して考察するか否かという

二者の立場が存在することが，アセスメント過程や性格をめぐり広義と狭義の解釈があり，それらの位置づけをめぐって少々異論があるようである（太田 1995:262）。しかし，アセスメント過程を狭義に理解する立場であっても，アセスメント活動が援助過程の局面から独立し，アセスメントと称する独自の目的を追求すること，つまり「アセスメントのためのアセスメント」があるわけではない（太田 1995:262）と指摘している。

ソーシャルワーク・アセスメントをプロセスから理解することを試みると，プロセスの中でアセスメントは独立しているわけではなく，その境界は曖昧となっている。そして広義に解釈するか狭義に解釈するかによってその位置づけが異なる。そのことがソーシャルワーク・アセスメントの概念や方法の共通理解をすすめることを困難にしていると考えられる。

2. ソーシャルワーク・アセスメントが捉えるクライエントの情報の範囲

岡本（2007）によると，従来の医学モデルの診断では利用者の問題の病理的側面に収斂してとらえ，その原因と背景との因果関係を追及することに焦点がおかれていたのに対し，生活モデル（life model）の考え方に大きな影響をうけたアセスメントでは利用者の問題の病理的側面に注目すると同時に，利用者の可能性，潜在能力，未開発の力量など内なる資源（inner resourses ママ）に着目するという点で，利用者の健康面，健全な諸側面，強さ（strengths）やコンピテンスに注目していくところに特徴がある（岡本 2007:673）。

山口（2009a）は，在宅介護支援センターで勤務するワーカー（社会福祉士・介護福祉士）へ聞き取り調査を実施することで，ソーシャルワーク・アセスメントにおけるワーカーの観察対象は単に介護保険サービス内に限定されていないことを明らかにした（山口 2009a:311）。決してワーカーのソーシャルワーク・アセスメントにおける情報収集は，サービスで対応可能な情報ではとどまらないのである。

また，ワーカーへの聞き取りによって，「全体と部分を往復しながら生活課題とこれを取り巻く状況が焦点化され，利用者の生活全体の文脈に沿った生活課題が明確化されるという特徴は，他職種が行なうアセスメントの結果との違いになって表れることもある」（山口 2009a:311）ことを明らかにした。つまり，これはソーシャルワーク・アセスメント独特の特徴であると言える。

Ⅲ. ソーシャルワーク・アセスメントに関する研究の動向について

1. ソーシャルワーク・アセスメント，ケアマネジメントにおけるアセスメント研究に関する調査

ソーシャルワーク，及びケアマネジメントに関するアセスメント研究の動向を探るために先行研究の調査を行った。

本節では，当初ソーシャルワーク・アセスメントに関する研究の動向について調査することを目的としていた。しかし，予備調査の段階で検索語を「ソーシャルワーク・アセスメント（本文あり）」で 12 件，「アセスメント and 社会福祉（本文あり）」とすると 612 件と調査困難であったため，調査範囲をソーシャルワーク・アセスメントと隣接領域のケアマネジメントに関するアセスメントとし，以下のように調査対象を決定した。なお調査手続きは，池田明子・住野好久（2012）「介護過程における構成要素とアセスメントの位置づけに関する研究」『新見公立大学紀要』33 109－113 にならった。

調査対象は，「CiNii　Articles 国立情報学研究所 学術情報ナビゲータ」で「アセスメント and 介護保険（本文あり）」「アセスメント and ソーシャルワーク（本文あり）」「アセスメント and ケアマネジメント（本文あり）」を検索語として検索し，最初の文献として確認できた 1988 年から本研究に着手した 2017 年までに確認できた 123 件の文献を研究対象とした（重複は取り除き済み）。そのうち本研究に適切でないと判断された 70 件を除く 53 件を有効論文とした。本研究に適切でないと判断したのは以下の理由によるものである。

（ⅰ）「本文あり」で検索したにもかかわらず，本文・要約が読むことができず，題名からは分類不可能な論文

（ⅱ）文章の一部に「アセスメント」とあるが，明らかに他のことについて書かれている論文

（ⅲ）明らかに社会福祉分野の「アセスメント」に関する論文でないと判断された論文

有効論文の 53 件を研究方法（実証研究，事例研究，理論研究，文献研究），年代ごとに分類した。（表 1）さらには研究対象機関・職種ごとに分類した。（表 2）なお表 1 では，アセスメントツール（表中では「ツール」と記載）作成・検討の項目を加えた。

表 1　研究方法・年代別

	1980 -1989	1990 -1999	2000 -2009	2010 -2017	計
年代別論文数	1	9	24	19	53
実証研究	0	1	6	8	15
理論研究	1	6	11	1	19
事例研究	0	1	0	0	1
文献研究	0	2	4	2	8
ツール検討	0	2	11	3	16
ツール作成	0	2	3	0	5
計	1	14	35	14	64

（研究手法・ツール作成／検討については複数選択可としているため，合計論文数が異なっている）

表 2　研究対象機関・職種別

研究対象機関・職種	1980 -1989	1990 -1999	2000 -2009	2010 -2017	計
精神保健福祉士	0	0	0	2	2
介護老人保健施設	0	0	0	1	1
ケアマネジャー	0	1	2	3	6
自治体	0	0	0	1	1
地域包括支援センター	0	0	0	1	1
医療ソーシャルワーカー	0	0	7	1	8
訪問ヘルパー	0	0	0	1	1
スクールソーシャルワーカー	0	0	1	0	1
計	0	1	10	10	21

「ツール検討」に関する文献は 2000 年代が最も多く 11 件であった。その一方で，「ツール作成」に関する文献は 1980 年代 0 件，1990 年代 2 件，2000 年代 3 件，2010 年代（2010 年～2017 年）0 件と大差がなかった。（表 1）さらに「ツール検討」について研究方法と合わせて考察すると，1990 年代では文献研究によって，他国で使用されている尺度や既存のアセスメント項目を検討する研究が多い（小原 2006 など）。その一方で 2000 年代や 2010 年代では，質問紙調査といった調査研究によって対象となる各現場で実証して検討する研究が多かった（嶌末・小嶋 1998 など）。

また表 2 について，対象とした文献 53 件のうち，研究者が取り上げた対象機関を確認することのできた文献は 21 件であった。対象機関の確認方法は以下の三つである。

（ⅰ）事例として取り上げられた機関

（ⅱ）研究者が質問紙調査等を実施した対象者とその所属する機関

（ⅲ）研究者が効果を比較した際に使用したアセスメントツールが使用されている機関

年代別で比較すると 1990 年代では 1 件であるのに対し，2000 年代，2010 年代はともに 10 件である。最も取り上げられた研究対象機関・職種は「医療ソーシャルワーカー」の 8 件であり，次いで「ケアマネジャー」の 6 件という結果になった。他には「精神保健福祉士」が 2 件，「介護老人保健施設」「自治体」「地域包括支援センター」「訪問ヘルパー」「スクールソーシャルワーカー」が各 1 件ずつであった。

また，この調査内容は太田（2009）の研究の内容に重なる。太田（2009）によると，ソーシャルワーク研究の流れは「基礎理論研究（第Ⅰ期）」から始まり，「方法過程研究（第Ⅱ期）」，「実践展開研究（第Ⅲ期）」と続いている。そして第Ⅲ期によって，アセスメントツールに関する研究が行われている。（太田 2009:227-239）

つまり現在は，各分野の現場の実情に応じたアセスメントツールを作成・検討するための研究が盛んに行われていると言える。

2. アセスメントツールとは

ツールとは，一般的に道具ということで認識されているが，ソーシャルワークにおけるツールについての定義はない（郡山 2007:104）。アセスメントツールを使用する意義は「利用者の状態を把握し，支援者が今後どのような支援を行うかというとき，利用者を取り巻く環境や利用のニーズや考えを記録にとどめておくことにある」（郡山 2007:96）。

またアセスメントに使用される「道具」の呼称については特に定まっておらず，「アセスメントツール」，「アセスメント・ツール」，「アセスメントシート」等複数挙げられる。本研究では，引用部分はそれに準じて，それ以外は「アセスメントツール」に記述を統一する。

3. ソーシャルワーク・アセスメントでアセスメントツールが使用されるようになった背景

杉本（1996）によると，アセスメントでアセスメントツールが使用されるようになったのは，我が国でケ

アマネジメントを実施したことによる。アセスメントシートを使用することは従来のケースワークの診断やアセスメントと大きく異なる点である。ケースワークでは，できるだけクライエントに自由に問題を語らせ，ケースワーカーが「明確化」の技法等を用いて，クライエントが自分の力で問題を整理し，ケースワーカーとの面接のなかで問題解決策を見いだせるように援助することが望ましいと考えられていた（杉本 1996:7）。

ケアマネジメントでアセスメントシートを使用する理由は，これまでの支援ではケースワーカーが一人でクライエントの処遇をしていたのに対し，ケアマネジメントでは保険・医療・介護職との連携が不可決となったためである（杉本 1996:7）。また多くのアセスメントツールは，「ソーシャルワーカーが利用者の情報を収集する」目的や，「ソーシャルワーカーの存在を広報する」，「帰属する組織での情報交換」を目的とするものであり（郡山 2007:97），援助者の「連携」とアセスメントツール利用の関連性は郡山（2007）からも伺える。

ケアマネジメントは，サービスのネットワークが複雑化し，サービスの重複や疎漏などの弊害が生じていた状況への対応策として，1970 年代の中期にアメリカで急速に普及した（玉木 2006:108）。アメリカで出現したケアマネジメントは，州立の精神病院の 2 分の 1 を閉鎖するという手段で精神障害者のコミュニティケアを推進しようとしたことに始まる（白澤 2006:644）。そして，この考え方や方法は，アメリカからイギリス，カナダ，オーストラリアといった国々，さらには日本へと導入され，世界の多くの国々で普及していった。特に，この方法は長期にケアを必要とする高齢者の地域生活を支援する方法として定着してきたといえる（白澤 2006:644）。

我が国でケアマネジメントを最初に取り入れたのは，1990 年から施行されている在宅介護支援センターである。在宅介護支援センターは，措置に基づく福祉サービスの利用や公的機関における機能の縦割り，あるいは資源の不足などによって利用者やその家族に生じる不利益を，利用者を主体としたケアマネジメントの実施によって克服することを目的に導入され，その強化が図られた。そして 2000 年から施行されている介護保険制度に導入され，要介護者等が介護保険サービスを利用する場合において中心的な役割を担うこととなった。（玉木 2006:109）

一方，障害者領域におけるケアマネジメントは，療育等支援事業や生活支援事業として実施してきたが，2006 年の障害者自立支援法で，相談支援事業者が位置づけられ，そこでケアマネジメントが一つの制度として実施されることになった（白澤 2006:645）。

中村（1998）もまた，我が国におけるアセスメント研究は，援助に向けての情報収集を行う質問紙やチェックリストの活用を通じて問題認識を行う具体的方法と連動して注目されてきたことを指摘し，それは，「ケアマネジメント概念が高齢者や障害者のソーシャルワーク実践に導入され，具体的社会福祉施策と直結したケアプラン作成の効率よい手続きや方法としてアセスメントを認知してきたことと関係が深い」（中村 1998:149）と述べる。

つまり我が国においてケアマネジメントは，サービスの複雑化を背景として普及し，介護保険制度によってその存在感を拡大していった。そして専門職間の連携といったケアマネジメントの特性に応じてアセスメントツールが使用されるようになったことにより，これまでのケースワークには存在しなかった「アセスメントツールの使用」という新しい流れがうまれたのである。

4. ソーシャルワーク・アセスメントでアセスメントツールを使用する意義

ケアマネジメントにおけるアセスメントと同様に，ソーシャルワーク・アセスメントでアセスメントツールを使用する意義は，援助者の認識や援助計画の根拠を明確にすることにある（増田 2015 など）。そして援助に「根拠」を示す必要性が求められるようになったのは，先述したように一人のクライエントに対して複数の援助者が「連携」することで援助を実施するようになったことに依拠する。

また太田・黒田他（2001）によると，アセスメントツールの役割をアセスメントではソーシャルワーカーが複雑な事例をいかに理解し認識するかということが重要になってくるため，支援過程でクライエントの生活を取り巻くさまざまな情報を整理し視覚的に表現することを通して，ソーシャルワーカーがクライエントの生活状況を把握することの手助けを目的としている。したがって支援ツールは，クライエントの生活状況を把握するためのコンパス（羅針盤）や GPS（global positioning system）の役割を果たすものである。しかし，あくまで支援をどのように展開するかはソーシャルワーカーの役割であり，専門性であるため，支援ツールはナビゲーターの役割をするのではなく，ソーシャルワーカーの情報収集や情報認識を支援するためのツールである（太田 2001:281-282）と示している。

つまり，一人のクライエントに対して関わる専門職の数が増えたり，サービスの種類が増えたことにより，より複雑化したソーシャルワーカーの業務（情報整理，記録）を整理するという点がアセスメントツールを使用する意義と言える。

5. ソーシャルワーク・アセスメントでアセスメントツールを使用する課題

アセスメントツールをソーシャルワーク・アセスメ

ントで使用する課題は二点挙げられる。

第一に，ソーシャルワーク・アセスメントで援助者が聞き取るクライエントの情報の中には，アセスメントツールに書き起こすことのできない類の情報が存在するという点である。

山口（2009a）は，在宅介護支援センターのワーカーを対象とした聞き取り調査からワーカーが「(居宅介護支援における）アセスメントが適切に行われていない」と考える要因について二点を明らかにしている。

一点目は，ワーカーは全体と部分の往復から利用者に応じて観察の焦点を絞る技法を用いるものの，アセスメントツールの「細分化され機能化された項目」に沿った網羅的な情報収集では，全体と部分を往復しながら焦点化する作業がないため，生活の全体の文脈のなかで生活課題を把握することが難しいということである（山口 2009:310-313)。

二点目は，定量的な調査項目では，「利用者の思い」（山口 2009:315) といったクライエントの主体的情報の情報収集や分析が困難な場合があるということである。また,「家事」といった家族独特の方法がとられていることが多い内容にも標準化しづらく，項目にすることができないものが多い（山口 2009:315-317)。

山口（2009b）は，山口（2009a）に引き続き，先行する知見とワーカーへの聞き取りを通してソーシャルワークの基本的技法（関係技法，面接技法，記録技法，評価技法）とチェック項目方式によるアセスメントツールの乖離について考察を行っている。その中で記録技法とアセスメントツールとの乖離として，利用者から語られるストーリーは援助を組み立てる際に活用できるものも多いにもかかわらず,「ストーリー」といった客観化することが困難な定性的な情報はチェック項目に記載することが難しいため，アセスメントの際にポイントを押さえられないことがある（山口 2009b:98）ことを挙げている。

また増田（2015）によると，利用者の「食べたい」という願いと,「食べる（ことができる)」行為との間には大きな差があり，後者は何らかの方法で「食べさせる」に変えることができるが，前者の「食べたい」という願いにはその人の意思や嗜好性が深く関係している。二つの次元の交差するところで，つまり二つの条件が揃うことではじめて「おいしく食べる」ことが実現できるが,ICF が示唆するところであっても,個々人の「主観（～したい)」を指標化することにどれだけの意味あるのか，その疑問はまだ解消されていないと指摘している（増田 2015:12)。

以上の研究から，アセスメントツールではその項目の性質上，クライエントの主観を拾い上げることができないという課題が挙げられる。

第二に，ソーシャルワーク・アセスメントを実施する際の援助者の主観をアセスメントツールでは考慮することができないという点である。

玉木（2006）によると，課題分析（アセスメント）では，要介護者等や家族との面接や関係者からの情報収集によって，要介護者等の健康状態，ADL，家族の状態などについて把握を行い，問題と課題を明確化する。そしてその結果に基づいてケアプランの原案を作成する。要介護者等の課題分析に際しては，個人の主観や方法に左右されない客観的な方法を用いなければならないとされ，職能団体や研究者によって多くのアセスメントツールが作成されている（玉木 2006:109-110)。

松岡（2001）は，アセスメントツールを使用するワーカーは客観的であることが望まれ,ワーカーの感情，感情，価値観はアセスメントに持ち込まれないことが大切と想定される（松岡 2001:267）と前置きしたうえで，実際にはワーカーが自身の感情や価値観や偏見をよく認識し，感情や価値観も実践に生かしていく創造性をもっていることを利用者としては希望しているのではないか（松岡 2001:267）と指摘する。

人と人が対面し，対話する際に互いの主観を無視することは不可能である。それはソーシャルワーク・アセスメントの場面でも同様である。しかし，アセスメントツールには誰が行っても結果に影響がでないことを目的としているため，援助者の主観は想定されていない。

そのような中で，現時点におけるソーシャルワーク・アセスメントの研究では，これまでのアセスメントツールでは収集・分析することができなかった主観的情報を捉えるためのアセスメントツールに向けての研究が進められている。その例として，利用者主体を根底に据えたアセスメントツールの必要性を唱えた（郡山 2007)やアセスメントシートにクライエントのエピソードを書き込むことを目的とした（増田 2015）が挙げられる。

また太田（2009）が，ソーシャルワーカーが勘や経験に基づく実践活動が科学的・専門的ではないと批判されることが多いことに触れたうえで,「勘や経験」にプラスして専門性を支援する多様なツールを開発し，ソーシャルワーカーの道具箱を豊かにする必要性がある（太田 2001:98）と述べるように，現時点ではクライエントの主観的情報やソーシャルワーカーの主観を認め，それをアセスメントに反映させることを可能とするアセスメントツールを開発することが検討されている。

Ⅳ．考察

以上のことからソーシャルワーク・アセスメントの意義とは，サービスの利用にとどまらずにクライエントのあらゆる情報を収集し，分析することでクライエントの生活課題を導き出そうとすること，つまりクライエントを包括的に理解することにあると言える。

また，現時点におけるソーシャルワーク・アセスメントの課題は，アセスメントの根拠を示すことに焦点を当てるあまりに，クライエントの主観的情報をアセスメント結果に反映させることが困難となっていることである。

現時点においてアセスメントツールで収集・分析することが困難だとされている主観的情報の収集・分析については，山口（2009a）によると，アセスメント実施者は体系的に学んでいるわけではなく，経験的に身につけている。さらに，ワーカーはその分析過程を言語化できていないともに，ソーシャルワーク・アセスメントの重要な位置づけであることを意識化できていない（山口 2009a:314-315）。

そのためソーシャルワーク・アセスメントは「多くの専門家が主張するような科学的作業が行われているわけではない」（J.Milner and P.O’Byrne 1998＝2001:10）。その中身は「個人的な『技』」（山口 2009a:315）や「職人技」（田中 2014:33）である。今後アセスメントツールの性質上困難とされている，主観的情報の収集・分析を明らかにする手がかりとして「技」の言語化が必要である。

前述したように，ソーシャルワーク・アセスメントに関する研究の動向をみると，これまでのアセスメントツールの項目には書き起こすことが困難とされていた主観的情報の収集・分析を可能とするようなアセスメントツールの項目を作成することの重要性はすでに検討されている。しかし，アセスメントツールの作成によってこれらの課題は達成することが可能なのであろうか。

筆者がこのように懸念するのは，ソーシャルワーク・アセスメントでは，クライエントの包括的理解を目的とするために，一人の人間の「思い」や「生活・人生」は言語化された尺度で語りつくすことができるのだろうかという疑念がぬぐい切れないためである。松岡が「アセスメントツールの尺度による理解は断片的な理解に過ぎない」（松岡 2001:270）と指摘するように，アセスメントツールに基づいた理解は部分的情報を明確にすることは長けているが，アセスメント本来の目的であるクライエントの包括的理解は難しいのではないか。また現時点では，クライエントの包括的理解を目指したうえでアセスメントツールの使用が検討されている様子が見られないことからも，これからのソーシャルワーク・アセスメント研究にはアセスメントツールの作成にとどまらず，よりよいソーシャルワーク・アセスメントの方法を探求し続けることが必要であると言える。

Ⅴ．おわりに

本研究では，ソーシャルワーク・アセスメントに関する先行研究を整理することにより，現状におけるソーシャルワーク・アセスメントの役割と課題を考察した。ソーシャルワーク・アセスメントは広義の解釈と狭義の解釈でソーシャルワーク過程における位置づけが異なることが，共通理解を困難にしていると推測される。またソーシャルワーク・アセスメントでは，課題となる病理的側面のみならずクライエントの主観的情報を含むありとあらゆる情報を収集・分析していることが明らかになった。

また，現在はアセスメントツールに関する研究が盛んであり，ソーシャルワーク・アセスメントでもケアマネジメントと同様に客観的な尺度を用いることで情報収集・分析の根拠を残すことが実践の主流になっている。アセスメントツールを使用することで複雑化したサービスや専門職間のやりとりが整理されるという意義が存在する。

その一方で，ソーシャルワーク・アセスメントが捉えるクライエントの情報の範囲はアセスメントツールで捉えることのできる範囲を超えている。客観化することが困難であるクライエントの主観的情報やソーシャルワーカーの主観は，アセスメントツールで捉えることができないクライエントの情報の代表的な例である。しかしアセスメントツールに書き起こすことのできない情報もまた，援助で生かされるべき情報である。

現時点においてアセスメントツールで捉えきれない主観的情報はソーシャルワーカーの「技」によって収集・分析が行われている。しかし，「技」の内容は言語化されておらず，アセスメント実施者自身も明確にすることができていない。今後ソーシャルワーク・アセスメントの発展のためには，「技」の分析が必要になると考える。

Ⅵ．今後の課題

ソーシャルワーク・アセスメントを実施するうえでソーシャルワーカー・クライエント両者の主観を無視することはできないという点と，情報収集と情報分析の根拠を示すことを強調するあまり，その結果としてクライエントの主観的情報やソーシャルワーカーの主観がアセスメント結果からは明らかにならないという点，この二点は相反する性質となっている。社会福祉分野の現場でアセスメントを実施する援助者はこの相反する性質の板挟みにあっているのではないかと推測される。そのため，現場で実際にアセスメントを実施

する援助者の声を聴くことで，これを明らかにすることが今後の課題である。

参考文献

1）J.Milner and P.O’Byrne（1998）Assessment in Social Work:Macmillian Press Ltd.（＝2001,杉本敏夫　津田耕一　監訳『ソーシャルワーク・アセスメント―利用者の理解と問題の把握―』ミネルヴァ書房）
2）池田明子・住野好久（2012）「介護過程における構成要素とアセスメントの位置づけに関する研究」『新見公立大学紀要』33　109-113
3）岩間伸之（2001）「ソーシャルワークにおけるアセスメント技法としての面接」『ソーシャルワーク研究』26-4(104)11-16
4）太田義弘（1995）「ソーシャルワークにおけるアセスメント―その意義と方法―」『ソーシャルワーク研究』20-4(80) 260-266
5）太田義弘・黒田隆之他（2001）「支援ツールの意義と方法」『ソーシャルワーク研究』26-4(104) 17-26
6）太田義弘　編著（2009）『ソーシャルワーク実践と支援科学―理論・方法・支援ツール・生活支援過程―』相川書房
7）大谷京子（2013）「ソーシャルワークにおけるアセスメント―研修プログラム開発の枠組み―」『日本福祉大学社会福祉論集』 129 1-13
8）岡本民夫（2007）「ソーシャルワークの過程と技能―ソーシャルワークの過程」中村優一・一番ヶ瀬康子他監修『エンサイクロペディア社会福祉学』中央法規 672-675
9）小原眞知子（2001）「家族介護におけるソーシャルワークアセスメントの研究―高齢者家族介護の事例を通して―」『久留米大学文学部紀要,社会福祉学科編』1/2 31-42
10）郡山昌明（2007）「保険医療機関におけるソーシャルワークの『ツール』に関する研究―利用者主体を根底に据えた『ツール』の開発の必要性―」『仙台白百合女子大学紀要』11 95-106
11）柴田範子（2007）「ケアワークの方法―ケアワークの過程」中村優一・一番ヶ瀬康子他監修『エンサイクロペディア社会福祉学』中央法規 724-727
12）嶌末憲子 ・小嶋章吾（1998）「ケアマネジメントにおけるアセスメントツールの比較検討:ケアワークの視点から」『介護福祉学』5(1) 58-72
13）白澤政和（2007）「ソーシャルワークの体系―ケアマネジメント」中村優一・一番ヶ瀬康子他監修『エンサイクロペディア社会福祉学』中央法規 644-649
14）杉本敏夫（1996）「ケアマネジメントの考え方と課題」『ソーシャルワーク研究』22-1(85)4-11
15）玉木千賀子（2006）「介護保険制度のケアマネジメントとソーシャルワークの関係―過程における両者の機能に着目して―」『沖縄大学人文学部紀要』(7)107-119
16）玉木千賀子（2015）「ケアマネジメントの特性についての研究:支援機能の先行研究に基づく考察」『沖縄大学人文学部紀要』(17)13-24
17）田中和彦（2014）「アセスメントプロセスにおける若手 PSW の困難さ―研修の方向性の模索―」『日本福祉大学社会福祉論集』130　31-43
18）中村佐織（1988）「ソーシャルワークにおけるアセスメントの意義―「診断概念」と「アセスメント概念」の比較を通して―」『社会福祉』28・29 87-95
19）中村佐織（1996）「ソーシャルワーク実践過程としてのアセスメント研究の意義」『社會問題研究』46(1)79-96
20）中村佐織（1998）「ソーシャルワーク実践過程におけるアセスメント機能」『社會問題研究』47(2)149-163
21）増田樹郎・愛知県居宅介護支援事業者連絡協議会　編著（2015）『ケアマネジャーのためのアセスメント能力を高める実践シート―愛介連版アセスメントシートの使い方・活かし方―』黎明書房
22）松岡敦子（2001）「アセスメントにおける技法とツールの意味」『ソーシャルワーク研究』26-4(104)4-10
23）山口圭（2009a）「ソーシャルワーク・アセスメントのプロセスが結果に反映されない要因」『聖学院大学論叢』21(3)307-320
24）山口圭（2009b）「ソーシャルワークの基本的技法とチェック項目方式によるアセスメントツールの乖離」『聖学院大学論叢 』22(1)93-104